
我ら放課後研究部員

日向色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我ら放課後研究部員

【Nコード】

N7172S

【作者名】

日向色

【あらすじ】

入学早々、秋月雛は変な部活に強引に入部させられてしまう。顧問は一つ目男！？部長は化け猫！？私の憧れの高校生活を返せバカヤロウ共おおおお！！！！！！

終わりとつ名の始まり

春麗らか、桜は舞い踊り心は浮き立つ。

「ふうーん、色々な部活があるんだなー…」

この前配られた部活一覧を見つめて、一人唸った。

私あきつきひな秋月雛は今年高校に無事入学することができて、あれだ…

華のJKデビューいたしました！（もちろん脳内では割れんばかりの拍手が。）

『雛ちゃん、バイバーイ!!』

「バイバーイ!!」

中学とは凄く離れてる高校に入学したから、こっやってクラスメイトにも馴染めたし!!

「そろそろ部活動、見てみよう」

…と、ここ桃之華高校入学一週間にして浮かれていた私が取った行動が、…あとの高校生活を左右させるまでの重要な選択になるうとは。

いいえ、私は見えません

鞆を肩に、手には部活紹介の紙。

確か今日から体験入部期間の筈だ。

どこに行こうかな、と紙を前にして思案していると、不意に肩を叩かれた。

「？はい、…！！」

『あ、あの、部活見学に行くんですか？』

おおふ…！！

後ろを振り向いた、後に思考停止。

『？あの、』

「史上稀にみるモツサリ男……！！」

『、は？』

「はっ……！！」

やば、口に出してた？

ぎこちない微笑みで目の前の青年に向き直る。

目は前髪で殆ど隠され、

その目すらも分厚い眼鏡で見えない。

全体的にダボツとした制服の着方で、

シューズ汚ねええ！

『…ちよつと、無視…？』

「う、あ！ごめ…何ですか？」

やばい、今だにこんな天然記念物並のがいたなんて…

つと、またmy worldに入るところだった。

「で、何か…？」

『ああ、うん。実はね、確認したいことがあって』

ほうほう、なんぞや。

『キミ、あれ、見える？』

あれ。

名前も名乗らないモッサリ青年に指をさされ、その方向に目を向ける。

ふよよん、ふよよん、

「…イエ（ス）」

だから見えてないってば

『ー…ふうん、へえ…』

何か言いたそーな青年から目をそらす。

ええ、私は見えません。

なんか羽が生えてて全体的にぼやけててこっち見てウィンクしてる
ミニサイズのおじさんなんて見えてないさ!!

『じゃ、さ。これ、なんて書いてある?』

「は?えつと、「放課後研究部へようこそ!!」「」

ぴらっ、とチラシのような紙を出され。
取りあえず読んでみたらなんだか前方からブリザード。

『うん、…見えてんじゃねえかオラ』

っひ！？

なんかいきなりオーラ変わったよこのモッサリー！！？

『はあい、強制レンコーレッツゴー』

「ちょ、わ、は、離して！！誰か助けて！！ヘルプミイイイイイ
イイ…」

拝啓、拉致られました

『よし、書け』

「…で、ここどこですか」

前略、皆様こんにちは

私、秋月雛16歳。

『イイから書け、この愚図』

「誰かー、助けてええ（切実）」

「……只今、拉致られています。」

「大体、アナタ誰なんですか何者ですかナマモノですかここドコなんでしょうかアレですかリンチ場ですかどうなんでしょうか」

「うるっせええええ！！」

ふん、私のことを無視するのが悪いのさ。

「い、い、から、書、け！」

「いや、ですう、う、う、う！」

グイッグイ押し付けられる入部届と書かれた紙には、「放課後研究部」という文字が。

あ、ちなみにこの押し問答、この無駄に広く豪華な部屋に拉致られて30分は続いています。

『いいから書け！！名前と印鑑だけでいいから！！あ、シャチハタは不可な』

いや判子なんて持ってないし！！

ていうかシャチハタ不可とかどんだけ重要書類なの！？

「だからっ、こんな得体のしれない部活なんてイヤですよおうー！お家帰りたいよー！」

うざがられる覚悟で号泣してみる。

だってほんとに訳わかんないし。

ていうか結局モツサリーが誰なのか、私は何のために…

『…ちっ、名前と判さっさと押せよ…』（小声）』

は、分かってますけどもね！！

「だからっ、あなたは誰で、ここはどこでっ！それでもってこの部活は具体的にどんな活動してるのか教えてもらわないとっ！」

『おら』

めちゃくちゃ高級感漂うソファ（むしろ玉座）にふんぞり返って座るモツサリーが、こちらに一枚の紙を投げてきた。

「わわっ、わっ」

慌ててキャッチしたので少しぐちゃっとなってしまった。

『愚図…』

「なんか言いましたかっ」

ぎっ、と精一杯睨むと、忙しい奴、と鼻で笑われた。
誰のせいだと思ってんだこの表裏真逆のギャップ野郎！！

放課後研究部、略して放研

イライラしながら紙を見ると、「放課後研究部概要」とでかでかと書かれていた。

…なんで最初に見せないんだ、この人。

『念のため聞いておくが、お前それ読めんのか？』

「へ？」

いきなり何言い出すんだこの人。
よもや本気で問うてはおるまい、と思ったらどうやら真剣（目が見えないから多分だけ）。ほんとこの人外見と中身噛み合っていない。

『で、読めんの？』

「あ、はあ…読めますけど…」

かなり煮え切らない返答だったけど、モッサリは満足だったのか
そうかそうかと頷いてる。

まさかとは思うけど、字も読めないアホだと思ってたと暗にバカに
してるのかな？

「ありえるー…」

『は？』

「いえっ、何でも！」

まあ、ちょっと卑屈になりすぎたかな。

訝しげなモツサリーに誤魔化すような作り笑いを浮かべ紙に目をおとした。

「放課後研究部概要」

1…

一度入ったら退部は断じて認めない

「…すいません、たった1コ読んだだけで嫌な予感しかしな…」

『気のせいだ（キツパリ）』

気のせいじゃねえよ！

先行き不安すぎるー！！

2
…

入るときは命の覚悟をするように

…。

「これ既に概要じゃねえよ!」

『気のせいだ』

そう言いながらなんでアンタは私と目を合わせない。

3
…

次からの項目はこの部の活動説明である。目を見開いて頭に叩きつけるように。

ここでやっとまともな項目か!!
ていうか言い回しがまともじゃないけどね!!

…だんだん自分がツッコミ体質になってきているのは考えたくない。

? : 活動時間
18時～4時

「はい、ストップ。」

「なんですかこの活動時間!?!」

『何って…放研の活動時間だけど?』

「ああ、この部活ってそう言う略し方するんですね…って違う!!
そういう問題じゃなくてっ…」

『まあ、いいから続き読めよ』

『何がいいんですか!!?この活動時間、人を夜行性って前提で作
ってますよ!?!』

『…よ・め』

「…ハイ。」

しびしび引き下がったのは身の危険を感じたから。

？：活動内容

校内の妖の相談、必要に応じ制裁

「それでは私はこれで!!」

『逃がすかア!!』

ダッ!!ガシッ!!!!

(離猛ダッシュ、モッサリー首根っこつかみ取り)

「はっ、離せこのっ!ゼツタイ入りたくなアアアイ!!」

『はは、諦める』

あともうちよつとだったのにいい!!

手を伸ばしときかけたドアはどんどん遠ざかっていく。

『さあ、これでこの部のことは分かっただろ？入れ』

「そこに拒否権はないのか！！私には認められてないのか！！！」

暴れる私、押さえるモツサリー。

この細い体のどこにこんなバカ力が隠されてるんだ！！？

ガチャ。

『こーんにーチハー』

『「！！？」』

『アレ…。お楽しみチュウでしたかー？』

...
L
L

新参者、登場

すごくニコニコしながら入ってきたのは先生だった。

スラッとした長身、巷で噂のイケメン顔、どこかズレたイントネーションに長めの金髪（自前かは不明）と、○×船長！！と叫びたくなるような眼帯。

「えと…蓮目「ハスメ」先生…？」

『ハイ！！ゴキゲンようアキツキ！！』

ヒラヒラと入り口付近で手を振る英語担当に曖昧に笑う。

どうして先生がここに？

そう思って聞こうとしたら、逆に爆発発言をかまされた。

『フフ…アキツキ？不純性行為はサスガに私の前では止めてほしい
ナー、なんて』

「…は？」

フジュンセーコーイ？

そう言われて自分の体勢確認。

ソファに押し付けられる私、のしかかって押さえつけるモッサリー。

うん。

「はっ、はなれるおお！！」

『ついて、』

な、ななななな…！

「貞操の危機…！！」

『勘違いすんなあほ』

殴られた。ひどい。

『oh、無理やりだったの？カワイソウなアキツキ。こんな男に迫られて…』

『だから勘違いすんなつつてんだろがこのボケ…！』

『ふふん、口の悪い男はモテないヨ？』

『余計な世話だ』

ガリガリと髪をかきあげ（フケとんでそう）また玉座にふんぞり返るモッサリーに蓮目先生は肩をすくめた。

『で？アキツキがここにいるってことは部活勧誘だロ？それとも自分のテリトリーで告白カイ？』

「ち、ちが」

『寝言は寝てから言え。こんな五月蠅い女願い下げだ』

オイ、ム力つくんだけど。

「私だって、モッサリーなんかゼツタイヤダし」

『ぶっ！……！』

思わず言い返したら、ものっすごいふかれた。

『オイ……』

「ただだって！！モツサリーが先に…！」

『ぶぶぶ…！モツサリー…！！ぶつ、ふふふっ！！！』

笑ってないで助けて蓮目先生ええ！！今私生命の危機なんですが！？

『カズ！いつまで笑ってんだ殺すぞ！！！』

イライラしてるのか、カツカツ肘掛けを指で鳴らしながら殺害予告するモツサリー。

それをうけながしながら笑い続ける蓮目先生はツワモノ…いや、生徒の立場から教師に殺害予告するモツサリーのがツワモノなのか？

『ぶぶつ、ぶぶぶ…！！いや、ゴメ…だって、ね？今のスズにはそのアダナ言い得てミョウってヤツだよ』

『チッ』

蓮目先生の反撃に、やっぱり思うところがあるのか舌打ちだけ。

てか…

「あの、>今のくって？ていうか>スズくって誰ですか？」

『…』

あ、あれ、なんかスツゴい気まずい。

『…ネエ、スズ。もしかしてキミ、自己紹介もせずアキツキを入部させようなんて…してないよね？』

長い沈黙のあと、口を開いたのは蓮目先生だった。

しかも、声が物凄く低い。

『ね、アキツキ、どうっ？』

「へっ！？どうっ、て…」

自己紹介はおろか、ここがどこなのかも分かんないんですが。

そう言うと、蓮目先生は溜め息をついた。

刺激的な自己紹介

『ごめんネ、アキツキ。今からちゃんと説明すルヨ。だから一旦座つて?』

「は、はあ…?」

先生に勧められるまま、イスに座る。
向かいに座るモツサリーは何が面白くないのかぶんむくれてる（雰
囲気参照）

『さー…アキツキ、まずここに来た理由は部活勧誘タツタよね?』
「あ、はい。それすらもここに来て初めてしりましたけど…」

『スズ———!!!!』

いやあの、なんでモツサリーは私を睨んでるの!?

『あー、モウ…じゃあ、この部についてぐぐぐらい説明されタ？』

そうきかれて、さっきの紙を渡す。

「これ渡されて…」

『ンー…ん！？コレ！？』

「え、あ、はい」

なんかまずかった？

『コレ読めたの！？』

「あ——、はい」

またか。

あんたらその紙の文字何語に見えるんだよ!!

『コイツ、見えるんだよ』

『ナルホド…だったら入ってもらっしかないネ?』

あ、なんか怪しい空気。

「じゃっ、私はこの辺で…」

『何言ってるのアキツキ。まだ自己紹介すんでないヨ?』

「いや、そういうのもういいんで…! ありがとうございましたそれじゃ…!」

がちゃん。

「がちゃん？」

『鍵、しめた』

にこやかな笑顔に負けじと笑顔で対抗していると、なんだか不穏な音が。

思わず口に出した疑問には玉座にふんぞり返ったままのモッサリーが答えてくれた。

「あーそうなんですかー、鍵閉め」

…鍵、閉めた…だと？

「は…はははは、最近のドアはハイテクですね！遠隔操作ですか！」

『アキツキ…』

「スツゴいなー人類の進歩は！！さすが、惚れちゃう！！！」

『オイ…』

「イヤだ認めない私は断つじて認めないぞ！」

『きけ』

「むぐつ！？」

突然口が何かに塞がれた。

もちろん私の意思じゃないし、モッサリも先生も私に指一本触れてない。

(…のに！！！)

向かいに座る憎き男の見えないはずの目が…

(殺気をまともにこちらに向けてる気がするのは私だけか——
!!!?)

『いいか、耳の穴かっぽじってよくきけ』

「……うー!!!!」

『俺の名前は猫宮スズ「ビョウグウスズ」』

「んー!!!!う、うー!!!!」

『察しの通り……妖怪だ』

こんな自己紹介って、ない(号泣)。

モッサリー ≠ イケメン（前書き）

先週は更新できずすみません…。

今回、モッサリーの暴君ぶりがハンパないです。
そして先生、笑いすぎ（笑）

モッサリー ≠ イケメン

『妖怪だ』

高らかに宣言した、目の前の男。

フツーの人だったら、

ハ？何アンタ大丈夫？精神科医紹介しよーか h a h a h a ! !

で済むかもしれない。いや、済むだろう。

けど、私にしたらもう生死に関わる大問題。

「んゝー！！んぐ、んむうー！！！」

『ちょっと、スズ、アキツキ苦しがつてる。離しナサイ』

『指図すんな、ボケ』

そういつつパツ、と口元の締め付けがなくなる。

一気に力が抜けて必死に息を整えつつモツサリー、もとい猫宮鈴を睨みつけたけど当の本人はさも相手にしてませんという風に前髪をかきあげた。

そして、ぞつとする。

厚い眼鏡の向こう側、こちらを射抜く目は金と紫のオッドアイ。

『アレ、スズ、もう変化^{へんげ}解くの?』

『どうせもう妖怪だってバレらしたんだ。つーかこのカッコ、女よけにはいいけどダサすぎる』

そのあとはもう、あっという間だった。

時間にして約5秒。

本人は欠伸して、肩回して、背骨伸ばして。

その動作のあいだに

髪はサラサラ、ツヤツツヤ、憧れのキューティクルで不快感を与えない絶妙な長さ。眼鏡を放り投げると顔の印象も180°逆転。鼻筋はとおって、羨むようなきめ細かい肌、薄い唇…

「アンタ、だれ」

『プッ!!』

『てめエ…!!』

あ、ヤバい。

「や、すいませんごめんなさい！！あんまりビックリしたものだから！！」

必死に弁解して、なんとか怒りは回避。

危ないあぶない…

『ぶぶぶつ…！サ、アキツキ。＞今の＜と＞スズ＜についてのナゾは解けタ？』

「あ、ハイ…納得はいつてないですけど」

『あん？どこに納得いつてねえんだよ』

「いや…私の中でモツサリー」目の前の外見はイケメン男猫宮鈴の方式が出来てませ…ヒッ！！」

『…外見は…ってどういう意味だ、コラ』

おおおおおう！！！！視線が私を殺すといっているうう！？

「ただただって！！目の前、約5秒の間に劇的　ビフォーアフター状態ですよ！？戸惑うにきまつてんじゃないですかあああああ！

「！」

『俺の質問に答えてねえ上に説明が解読不可能だ。だれか通訳を呼んでこい』

「なんだかサラツと毒舌ぶりを見せつけられたけど気にしない！！
ていうか言ってることが要領をえないのはアナタの視線がブリザー
ド級だからです！私の心に安息をください、身が持ちません！」

『却下』

「何故に！？」

『マア、マア。2人共落ち着いて』

これが落ち着いていられるか！！と思ったけどなんとか口を嚙^{つくむ}む。
だってまた睨まれたくないし。

対する鈴とやらも不満そうに猫耳をピクピクと…

…猫耳、だと？

『あ、気付いたミタイ
だな』

「あ、え、な、う、？」

『ここは地球だ。せめて地球言語を喋れ』

ウルサイ、分かってるわ！！

…とは、言い返せなかった。

汗と涙と血の、（前書き）

今更ですが、この話は作者の無いに等しい知識と溢れんばかりの妄想の賜物です。

事実とちがったりしても見捨てちゃだめなんだからっ（照り）

…スイマセン、頑張ります。

汗と涙と血の、

「ど、な、な…」

パクパク、陸にあげられた魚のように口を開閉。深呼吸しても、目をこすってもそれは消えない。

むしろ、鈴の後ろから二本の黒い尻尾まで見えてきた。

『ぶ、アハハ！！アキツキ、超戸惑ってる』

『こいつ、頭大丈夫か』

とうとうこらえ（きつてなかったけど）笑いもかなぐり捨てて爆笑する蓮目先生と、嘲り混じりのオッドアイに見据えられてやっと我に返った。

「猫耳！？まさかのモエ、ですか！？」

『なア、お前本当に頭大丈夫か？』

猫耳つけて、尻尾まで標準装備のお前に言われたかねーよ！
しかもなにげに本気で心配してる目だし逆に悲しいわー！

『ぶぶぶっ…ネエ、アキツキ。彼は猫ねこ又またなんダよ』

「へ…ねこ、また？つてあの長生きしたネコが妖力をもつてなるっ
ていう？」

『それくらい察せ』

んなムチャな。

『そ、猫又。シカモとーっても強い猫又なんダよー』

『フン』

「はー…そうだったんですねー…って」

(受け入れちゃってる自分ってどうなの…!!！)

『?アキツキ?』

「あー、大丈夫です。で、見たところ先生はフツの人間の姿ですけども、ホントは妖怪だったりしてくれちゃうんですか」

『オー、察しがいいね、アキツキ!!』

「ははは」

してくれちゃうんだ。

『コイツは一つ目男だ。んで、この放研の顧問でもある』

『改めてよろしくネー、アキツキ!!』

「あ、よろ…」

しくじゃねえ。

「あの、まだ私ここに入るなんて一っ言も言っていないんですが」

『あ？決定事項だろうがよ』

「いや、何勝手に決めてくれてるんですか!!イヤですよこんな高等妖怪に囲まれて学校生活おくんの!!」

『アキツキヒナ、16歳。9月26日生まれの天秤座』

あん？

『アってる?』

「ええ、あつてます…え?」

『実家は墓に囲まれた超絶心靈スポット…今はこの学校近くのアパート住み。お前、自分の家から逃げてきたのか?』

「え、ええ、えー?」

『身長は153?、スリーサイズは上から「あああああああああああああ!!!!!!」』

個人情報漏洩

突然目の前で繰り広げられた暴露大会に目を白黒。

最終的にスリーサイズまで暴露されそうになった。何コレ、コワイ。

「い、きなりなんなんですか!?!ていうかどこから出した、その見るからに怪しい本!!!!?」

『ん、これか?』

優雅に足をくんでつらつらと読み上げた、私の事が書いてあるらしい分厚い本。(?とかいてあるのは気のせいか)

手品としか思えないくらい気付いたら鈴の手に収まっていたけど、
もしか尻の下にでも敷いていたのか。

『コレはネー、この学校の全校生徒のプロフィール』

「……」

ダメだ、展開が規格外すぎる。

「つかぬことお聞きしますが、何故そんなものをお持ちあそばせちやってるんでしょうか？」

『敬語おかしいぞ。権力は武器になる、覚えておいて損はないぜ？』

いや、そんなどや顔されても。

ていうかそんなホイホイ権力振りかざされたらたまったもんじゃないぞ、オイ。

『ていうかお前、まだここがどこか分かんねえのか』

「が、学校」

『バカ、アホ、マヌケ、チビ。この部屋だよボケ』

「なんでそこまで言われなくちゃいけないんですか！！知りません」

『生徒会執行部室、またの名を放課後研究部部室』

「……^^」

「……強奪でもしたんですか」

『は？』

「はい？」

『ぶふっ！！』

え、違うの？だってこの人なら『この部屋は俺様にこそ相應しい、出ていけ愚民ども』くらいやりかねない。

『……口から全部駄々漏れだぞコラ』

「えっ！……てへ？」

『歯あ食いしばれ』

「暴力反対イイ!」

『ぶふぶふっ、マアイイじゃない、スズ。今より、後から知った方がビツクリするだろうし、…面白そう』

おのれ後者ののが本音だな!?(先生のほっぺが破裂寸前なのがいい証拠。イケメン台無し)

『あー、けど、うるささも増すんじゃない?』

『でも今教えたら絶対逃げるよ?』

『そんなときや拉致か「当事者押し」のけて会話進めないでください!というか今拉致監禁とか物騒な単語が出てきかけた気がするんですが!?』

『ハン、何を今更』

「アンタが今更って言うんですか」

ま、ホント今更だけどね！！

『ふふ、スズ、そろそろ話戻しタラ？』

『入れ』

「話戻すの早い！！だが断る」

私の切り返しに、しばし沈黙したあと…

鈴は、物凄い黒笑いで私を見つめた。
なに、コワイよ？

『学費、免除』

ぴくり。

肩が震えた。

『勉強しながらバイトは、キツいんじゃないのかー…？』

「なっ…!!」

何故知っている!?

『アラー、アキツキ。うちの高校はバイト禁止だよー?』

「ぐっ…」

『普通だったら停学モンだな』

「うぐっ」

ど、どうして…！

『カン』

…人の心を読まないでください。

「ふ…とうとう恐喝ですか…！」

『なんとでも言え、俺は手段は選ばねえ』

「どこの暴君ですか！！サイテー、最悪、男の風上にも置けない！！！」

『クロス』

「なんとも言えって言ったのに——！！！！」

『マアマア、アキツキ。悪くない条件でしょ？YESなら学費免除だよ？』

「うー！！！！」

『ちなみに断れば退学だ』

「ちょっとまって」

退学、たいがく、タイガク、TAIGAKU、expulsion
from school、
：

「退学！？」

『おかえり』

「ただいまです。なんで！？」

『権力は武器だ。 repeat after me』

「泣いていいですか」

『ア、キ、ツ、キ』

ぼん…（肩に手を置く音）

『A person must know when to give up（諦めが肝心だよ）』

サ——（燃え尽きて灰になる音）

サヨナラ、平凡なJKライフ。

∴ コンニチハ、汗と涙と血の茨道。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7172s/>

我ら放課後研究部員

2011年10月9日01時14分発行